鳴門教育大学研究紀要
第28巻　2013

近世節用集における「地理」の掲出状況

立　岡　裕　士

（キーワード：節用集　地理　近世）

1　問題の所在

近世地理学を総観した研究は少なくない（阿部（1932a，1932b）・岩根（1933, 1936）・辻田（1971）・藤田（1931, 1984）・村松（1934）など）。しかしそこでは，対象範囲をどのように設定するか（すなわち近世の地理学をどう定義するか）という問題は取り上げられていない。岩根（1936）・辻田（1971）は近世に近代地理学の萌芽を求めようとするのであるから，この問題はそもそも存在しない。それ以外の研究においても，結局のところ近代地理学を前提としているが故に改めて定義する必要を感じなかったということであろう。そのように近代地理学を投影して把えた近世地理学が，当時の人々の理解する「地理学」と同じとは限らない。かくして筆者は同時代史料によって内在的に近世地理学を定義することを試み，まず地理書の著者・読者が地理書をいかに判断しているかを調べた（立岡，2012）。その過程で次の２点に気づいた：

・いわゆる名所記や名所案内も含め公撰・私撰の地理書や地理的な書物において「地理」という語はあまり使用されていないように見える（たとえば日本教科書大系に地理科往来として収録されている往来物のうち，『世界国尽』以前に書名・序・本文のいずれであれ「地理」を用いているものはない）。このことは名所記・名所図会や往来物が「本格的な」地理ではないことの現れであると理解することも可能であろう。しかし立岡（2007）で取り上げた54の公撰地誌においても「地理」に言及するものは16にすぎない[1]。

・その一方，蘭学・洋学的な場では「地理」が広く使用されているように見える（蘭語その他の地理書が引用・翻訳されるようになれば「ゼオガラヒー」の訳語として「地理」が定着し（海外情勢を論ずる場合に）汎用されるようになることは当然ではあろうが）[2]。

本稿は，この二つの印象が，傑出した個人についてではなく，社会の広汎な水準において妥当であるか否かを確認する作業の一環である。すなわち，近世庶民向けの参考書である節用集を史料としてそこに「地理」がどのように現れるかを調べることにより，「地理」という語が社会的に必要な語と見なされていたか否か，さらに近世後半～末の情勢（海外事情への関心の高まり）が「地理」の在否に反映しているか否か，を考えたい。

2　史料

節用集とは，中世に起源し，近世には庶民のための参考書として刊行された一連の図書に使われた書名である[3]。行論に必要な限りでその特徴を挙げれば以下の通りである（主に久保田（2000）による）：

①節用集は改まった場（公的な文書作成など）に必要な形式的・表面的な知識を提供するものである。その中核をなすのは，既知の単語の漢字表記を知るための語彙集である。多くの節用集では収録語（文字）の多くに音・訓のフリガナをつけている。同義語・出典などを注として付する場合もある。しかし若干の例外的な節用集を除いて，詳細な注釈がつけられることはない。収録語数は１万前後のものが多く，２万を超すものは全体の約１割，３万を超すものはその半数の13点である（高梨，2004）。

②語彙集部分は，18C 半ばまでは通常，語頭の音のイロハ順に集められ，さらにそれぞれの中で意義別に分類されて掲示されていた（意義分類は13程度のものが多い（米谷，2003）[4]が，それ以外のものも少なくない）。18C 後半に，そうした意義分類をせずに音の数によって単語を配列するもの（「早引節用集」）が現れ，19C になるとこの型が在来型を圧して主流となる。

③収録された語彙は，近世当初は祖型となった易林本節用集から難語を削ったものであったが，元禄期には書簡や日常文書の用語が増補されたものが多い（米谷，1997）。しかし元禄期にもまたその後にも俳句・和歌など

のための語彙を増加したものもある（菊田，2004）。いずれにしても，節用集は先行節用集の収録語を踏襲する部分が大きく，同時代的な言語の使用状況を必ずしも反映していない。また菊田（2004）は，この保守性は付録にも見られるとし，講談社『日本古地図大成』解説編 p. 80の解説65図に対する説明（元禄期刊行の大坂図が80年後に刊行された節用集の付録として利用されている旨）を引用し，同様の問題が日本地図にもあることを指摘する。

④易林本節用集にも「南瞻部州大日本正統図」のような付録がつけられていたが，17C 後半からこの付録部分が拡充されるようになり（佐藤，2011），元禄期になると日用百科的なものも現れた。当初の「早引節用集」はこうした肥大化に対抗した簡易型の節用集でもあったので，19C になると在来型の節用集には付録部分を一層拡充して差別化を図るものが現れた。それにともない，19C 半ばには「早引」も大型化するようになった（佐藤，2006）。

⑤節用集は相対的に高価なものであり（佐藤，2002a），庄屋・町年寄やその補佐役までが流布の限界をなす（横山，1990）。子どもを含む初学者が使うものではないが（佐藤，2002b），使用者にもさまざまな知識水準のものがおり各自に見合った種類の節用集を利用していた（佐藤，2003a）。また大型化した節用集では，頻用する部分は人により同じではない（横山，1990）。

本稿の目的には③で指摘された守旧性は障害となりうる。しかし，本稿は節用集に盛られた語彙全体を対象とするのではなく特定の語の有無を問うのみであるから，古い語彙が残存すること自体は問題ではない。新語の採録と必ずしも矛盾するわけではないからである（実際，『頭書大益節用集綱目』（1690年刊）の須弥山図は，井口常範の『天文図解』（1688年刊）所載のものと同内容である（同一ではないが）。『頭書大益節用集綱目』が『天文図解』を模作したのか否かは筆者には不明であるが，この図が収録されるに当たっては『天文図解』の影響があったのではなかろうか。また菊田（2004）が指摘した日本図も，（『節用集大系』所収本のなかでは）この節用集が最初に付録としている。地図の更新に意を用いないその後の書肆の怠惰さは問題とならないとはいえないが，最初に採用する際に流行への反応は決して悪いとは言えないように思われる）。したがって節用集は，「地理」という語がある程度広い範囲でどのように使われたかを考えるための一つの史料として利用できるであろう。

かくして本稿では『節用集大系』（大空社）所収[5]の節用集を史料として用いた（付表）。各節用集について以下の 3 点を調べた：

①節用集の中核をなす語彙集部分に「地理」（および，「方輿」「方志」「地利」[6]「地図」「地志」「坤輿」「風土記」「風景」「絵図」「名所」）が採録されているか否か（注釈として含まれている場合も含む）

②部門の名称や解説文に「地理」という語が使われているか否か

③付録として地理的なもの[7]が収録されているか否か

なお，蘭学・洋学系の地理的知識との関わりを問題とするためには，収録地名のうち東アジア以外のものについても検討する必要があろうが，作業の都合上，本稿の段階ではこれを断念した。

3　結果

結果を稿末の付表に示す。ただし「風土」を採録していたのは91（以下，簡略のため節用集に対する言及は付表に示した番号で行う）のみであった（「風土記」はなし。同じく「方志」「地志」「地図」も皆無[8]）。逆に「名所」は79種の節用集で，「絵図」も58種で採録していた。したがって表を簡略化するためにこれらの語彙については表示を割愛した。表からは以下の 4 点を読むことができる：

・部門名に「地理」を設定したのは54・91のみであった（ただし，52の巻末には「扁引字尽重宝記」があり，文字を20門に分けるなかに「地理」部が設けられている）。部門の説明欄に「地理」を用いているのは93の「乾坤」の説明だけであった（ただし「天地日月あめ風ゆき霜地しんかみなりいなびかり等天変地理社堂宮殿家屋の名国所地名山川の名あり」という文章から見ると「地異」の誤りではないかと思われる）。

・「地理」という語は，33のような特異なもの（高梨，2004）は例外として，18C の末になるまで節用集には収載されない。19C 前半といえどもこれを載せるのは少数派である。しかし1840年代末以降に出されたものになると，ほとんどのものが「地理」を載せる[9]。なお，「風景」も同じ頃から（しかし「地理」よりは確実に）採録されるようになる（単なる偶然であるか否かは判断できないが）。

・「方輿」「輿地」「坤輿」などの語は例外的に採録する節用集があったのみで，少なくとも「地理」に替わって使われたようには見えない。

・1680年代に節用集に図解が掲載されるようになった初めから，日本地図を含む地図も掲載されている。世界地図ないしは外国地図は1733年の35・36からであるが，幕末に至っても日本地図ほどには頻繁に掲載されていない。したがって，世界地誌に対する関心の変化について，この点から判断することは難しい。ただし，54に「地球」が採録され，「地球図」「地球儀」などの語が収載されるようになる点にこうした変化を窺うことができるかもしれない（やはり18C 末以降）。

「地理」採録の有無には，こうした外部的な要因だけでなく，収録語数の多寡という節用集の内的な要因が絡んでいる可能性もある。表１には先行研究において収録語数が推定されているものを示した。事実，「地理」を採録しているのは主に91以下の収録語数の著しく多い節用集である。89のように，それほど巨大ではなくても「地理」を採録している事例もあるものの，1.8万という語数は決して小規模とはいえない。

以上を要するに，少なくとも18C 末まで「地理」は庄屋階層の人々が改まった文章を書く場合に参照する必要の少ない語であった，ということが知られる。これを，「地理」という語が日常的に頻用されているが故に収載されなかったと解することもできないわけではないが，その可能性は低かろう。したがって，その時期までの改まった文章に使われない語であったと考えねばならない。このことは直ちに，庶民の生活において「地理」が使われなかったことを意味しない。しかし，当時の人々にとって「地理」という語が（いささか学問をすれば目にする機会のある語であっても）直接には関わりのない抽象的ないしは茫漠たるイメージしか与えない語であった，と想像することはできるのではなかろうか。一方，これ以後に「地理」を書かねばならない情勢としては，冒頭に問題とした緊迫する対外情勢（ないしはそのために浸透した蘭学系「地理」観念）の他にも，19C 前半の公撰地誌編纂の動きに，庄屋階層の人々が従来以上に動員されたことも考えうる。

いずれにせよ本稿で利用した節用集はあくまで一部の標本に過ぎず，しかもまた節用集採録語自体が庶民の言語生活を直截に反映しているものではない以上，単純な因果関係を見いだしたり，その根拠と見なすことは現段階では不適当であろう。さらに検討を深めたい。

注

1）「地志」を「地理志」の省略形と見なすならばさらに10増えるがそれでも半数以下である。もとより「地理」が『易』にあり『漢書』に「地理志」がある以上，儒学的（ないしは知的な）場で「地理」という語が使われることがないではない。辻田（1971, 第３章）も熊沢蕃山・山鹿素行・荻生徂徠・太宰春台などが「地理」を論じていることを指摘する。

2）ただし，ヨーロッパ人が天文地理に長じているという言説は，蘭学勃興以前の17C 末までにすでになされており（『乾坤弁説』（文明源流叢書２, p. ２）・『二儀略説』（岩波書店日本思想大系63『近世科学思想下』p. 10）），『紅毛談』（文明源流叢書１, p. 434）を経て18C 後半につながる。この間，『采覧異言』においても（ヨーロッパ人一般ではなく特定の個人・国民についてではあるが）同種の表現が見られる（『新井白石全集４』p. 813）。こうした言説も関係しているのではなかろうか。

3）近世を通して多くの書肆から多様なものが刊行された。「節用集」を冠しないものもある。したがって節用集の範囲は論者によって必ずしも同じではない。佐藤（2009）は検索機能の弱い語彙集型往来物を除いても，500種以上刊行されたとする。これに対して高梨（2004）は現存して確認できるのは250種程度であるとする。

4）たとえば近世中期の典型とされる『大広益節用集』（1696年刊）では次の13部門である：乾坤・時候・神祇・官位・人倫・名字・衣食・支体・気形・草木・器財・数量・言語。ただし部門名の用語・用字には一冊の中で統一のとれていないものが多い。次章で特定の語が掲出される部門を指示する場合には目録に掲げられた部門名を用いた。

5）厳密には，そのなかの近世刊行のものに限る。しかも第８巻所収の『真草二行節用集』は第７巻所収のものの復刻版であるという（第８巻解題）ので，また『武家節用集』（第100巻所収）は武家用品を対象とした特殊分野の節用集であるため，いずれも表示を省いた。したがって付表に示したのは95種である。

6）「地利」という語は，いわゆる「地の利」のほかに土地からの生産物の意味をも有する漢語であり，おそらくはその派生義として地的利得という意味で古代から使われている（『日本国語大辞典』第２版では10C の用例を掲げる）。ところが『日本国語大辞典』第２版が「土地」の意味に解した「浮世物語」（1665年頃）第２巻９話の「地理」を，岩波日本古典文学大系も小学館日本古典文学全集も「地利」の意味かとする。また

後述するように，「地理」を採録する節用集のなかにはそれに対して「孟子」という注記を付するものがある。しかし『孟子』に「地理」の用例はなく，おそらく公孫丑下編第１章の「地利」を指すものと思われる。これが，それらの節用集編者の『孟子』に対する誤解によるものか，「地理」という見出しが誤りなのか，あるいは「地利」と「地理」とは同義の異表記として通用していたためなのか，現時点では筆者には不明である（「地利」が他の節用集で言語門に分類されているのに対してそれらでは「地理」が「乾坤門」に分類されていること，および「地理」を掲載する他の節用集でのフリガナから見て，単純な誤りではないと思われるが）。そこで本稿では「地利」の出現状況も併せて示した。

7）ここで地理的なものというのは，節用集の部立てでいえば「乾坤」の「地」に属するであろう，山川国郡寺社名所旧跡などである。後述するように，それらを「地理」という観念で括っている節用集もあるので，この捉え方は節用集の立場と親和的であると考える。とはいえ，それらが節用集全般に適用できるか否かはむしろ解決されるべき問題であって，前提とすべきことではない。その意味で「地理」的とする判断は当面は筆者のものにすぎない。ただしそれらの付録については本稿では参考資料であるにすぎず，この判断自体が問題となることはないと考える。また地図と名所画との境界も曖昧であり，名所画と風俗画ないしは行事画との境界も曖昧である。ただ本稿では参考資料とするにすぎないため，名所画は含め，祭礼を主題としたものは除いて表示した。

8）76・90には「折地図」という語が採録されている。しかしこれは「分間絵図（ブンケンエヅ）」と組で掲示され「同」というフリガナが振られているので折り本の分間絵図を指すものと思われる。

9）逆に「地利」は17C にはほぼ全ての節用集に採録されていたが，18C になる頃から採られなくなり，42を最後に消えてしまう。類義の「地子」「地資」に吸収されたのか，同音の「地理」の使用が増えるにつれて使われなくなったのか，現段階では不明である（ただし節用集の守旧性からすると，実際に使用されなくなったとしても，「地理」が使用されるようになるのと並行的であると考えるのは速断であろう）。

文献

阿部真琴（1932a）江戸時代の地理学－地誌と地図－（上）。歴史地理，60，455～462

阿部真琴（1932b）江戸時代の地理学－地誌と地図－（下）。歴史地理，60，546～552

岩根保重（1933）徳川時代の地誌の概観。岩波講座地理学［別項］，１～14

岩根保重（1936）近世日本地理学史序説。地理論叢，８，285～320

久保田篤（2000）近世の節用集について。日本語学，19－11，252～269

菊田紀郎（2004）近世節用集。日本語学，23－12，242～251

米谷隆史（1997）元禄期の節用集について。語文，69，13～21

米谷隆史（2003）近世中期節用集の意義分類をめぐって。国語語彙史の研究，22，113～133

佐藤貴裕（1990）早引き節用集の流布について。国語語彙史の研究，11，277～302

佐藤貴裕（1993）書くための辞書・節用集の展開。月刊しにか，４－４，16～23

佐藤貴裕（1996）近世節用集の記述研究への視点。国語語彙史の研究，15，21～39

佐藤貴裕（2002a）近世節用集の価格。近代語研究，11，115～129

佐藤貴裕（2002b）子どもと節用集。国語語彙史の研究，21，217～235

佐藤貴裕（2003a）村の節用集：農村の文字生活との連関試論。岐阜大学国語国文学，30，21～33

佐藤貴裕（2003b）『大成無双節用集』の成立。国語語彙史の研究，22，135～149

佐藤貴裕（2004）早引節用集の位置づけをめぐる諸問題。岐阜大学国語国文学，22，１～14

佐藤貴裕（2006）19世紀近世早引節用集における大型化傾向。近代語研究，13, 241～256

佐藤貴裕（2009）近世節用集刊行年表稿。書物・出版と社会変容，６，141～160

高梨信博（2004）『和漢音釈書言字考節用集』。日本語学，23－12，231～241

立岡裕士（2007）近世公撰地誌の構成について。徳島地理学会論文集，10，65～73

立岡裕士（2012）近世地理学の内在的定義の試み。2012年度人文地理学会大会　研究発表要旨，60～61

辻田右左男（1971）『日本近世の地理学』柳原書店

藤田元春（1931）江戸時代に於ける我国地理学の発達。岩波講座地理学［別項］，１～22

藤田元春（1984）『日本地理学史』原書房

村松繁樹（1934）日本地理学史。岩波講座地理学［総論］
横山俊夫（1990）日用百科型節用集の使用態様の計量化分析法について。人文学報，66，177～202

表１　節用集の収録語数

番号	巻数*	書名	刊年	収録語概数（万）	典拠
1	2	節用集	1596－1615	1.0弱	久保田（2000）
2	3	節用集	1611		
3	4	二躰節用集	1629		
4	5	節用集	1630		
5	5	二躰節用集	1632		
6	6	二体節用集	1635		
7	7	真草二行節用集	1638		
8	9	真草二行節用集	1650		
9	9	真草二躰節用集	1651		
10	10	真草二行節用集	1651		
15	13/14	合類節用集	1680	2.2	高梨（2004）
16	15/16	新刊節用集大全	1680	3.8	高梨（2004）
20	19/20	広益二行節用集	1686	2.3	佐藤（1994）
22	21	鼇頭節用集	1688	2.0	久保田（2000）
25	23	頭書増字節用集大成	1697	1.0	久保田（2000）
26	24	頭書増補大成節用集	1699	1.0	久保田（2000）
33	81/82	和漢音釈書言字考節用集	1717	3.3**	高梨（2004）
41	31	永代節用大全無尽蔵	1752	1.5	佐藤（1994）
44	34	袖中節用集	1758	1.4	佐藤（1994）
53	40	万代節用字林蔵	1782－1795	1.7	佐藤（1994）
70	56	早引節用集	1814	1.2	佐藤（1990）
83	69	早引節用集	1843	1.2	佐藤（1990）
85	71	数引節用集	1846	1.2	佐藤（1990）
87	72	嘉永早引節用集	1855	0.7	佐藤（1990）
89	73/74	大成無双節用集	1849	1.8	佐藤（2003b）
91	77/78	万代節用集	1850	6.5	佐藤（2006）
92	79/80	永代節用集	1850	3.3	佐藤（2006）
94	57/58	江戸大節用海内蔵	1863	4.2	久保田（2000）
95	84/85	大全早引節用集	1864	4.1	佐藤（2006）

*「番号」は稿末付表に示した，本稿で対象とした節用集の番号である。「巻数」は『節用集大系』における当該節用集の収録巻数を示す。
**高梨（2004）には「32793」という精確な値が示されている。

付表　節用集における「地理」採録の有無

番号	巻数	書名	刊年	部門	語彙						
					方輿	地利	地理	輿地	風景	坤輿	地図
1	2	節用集	1596－1615	13		言語					
2	3	節用集	1611	13		言語					
3	4	二躰節用集	1629	13		言語					
4	5	節用集	1630	13		言語					
5	5	二躰節用集	1632	12		言語					
6	6	二体節用集	1635	12		言語					
7	7	真草二行節用集	1638	13		言語					
8	9	真草二行節用集	1650	15		言語					
9	9	真草二躰節用集	1651	16		言語					
10	10	真草二行節用集	1651	12		言語					
11	10	真草二行節用集	1664	12		言語					
12	11	真草二行節用集	1665	12		言語					
13	12	頭書増補二行節用集	1670	13		言語					
14	12	二行節用集	1674	13		言語					
15	13/14	合類節用集	1680	24							
16	15/16	新刊節用集大全	1680	18		言語					
17	17	翰墨節用	1673－1681	－	○†					○†	
18	17	頭書増補二行節用集	1685	13		言語					
19	18	頭書増補節用集大全	1685	13		言語					1
20	19/20	広益二行節用集	1686	13		言語					
21	18	頭書増補節用集大全	1687	13		言語					
22	21	鼇頭節用集	1688	22							
23	22	頭書大益節用集綱目	1690	13							3
24	23	頭書増補節用集大全	1694	13		言語	（？）				1
25	23	頭書増字節用集大成	1697	13							5
26	24	頭書増補大成節用集	1699	13							5
27	24	頭書増補節用集大全	1700	13		言語					4
28	25	世話用文章	1709	8							
29	25	童子字尽安見	1716	64							
30	26	男節用集如意宝珠大成	1716	12					言語		
31	26	大国花節用集珍開蔵	1717		？		（？）			？	2
32	27	大益字林節用不求人大成	1717	13							4
33	81/82	和漢音釈書言字考節用集	1717	12		言辞	乾坤*		言語		
34	28	満字節用書翰宝蔵	1730	13						？	1
35	28	大富節用福寿海	1733	13			（？）				2
36	29	悉皆世話字彙墨宝	1733	19							1
37	30	森羅万象要字海	1740	12							

地誌的付録	備考
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽。内裏殿名・門名	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
	†「地」の同義語として掲出 部門立ての有無は不明瞭
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽。内裏殿名・門名	
京町尽。五山。国尽	
五山。国尽	
京町尽。国尽。内裏殿名・門名	
京町尽。五山。国尽	
京町尽。五山。国尽	
外国人像。京町尽。五山。国尽	地図は世界図を含む
京町尽。五山。国尽	
	コ方時器用：渾天儀
名所尽。京町尽	コ器財：渾天儀
国尽。寺院尽。京町尽	
	*（謂東西南北国土山川水石草木類） コ器財：渾天儀
国尽。禁中図説。京町尽	
海外行程	地図は世界図を含む
国尽。京町尽	地図は世界図
岩国錦帯橋。大坂からの国内外道程。五山。「日本海陸之記」。二十二社一覧。諸国神社数。札所一覧（洛陽・大坂・関東・秩父・江戸・永代・西国）。諸国大橋間数。諸国温泉。「北国諸道八木大坂入津備考」	

番号	巻数	書名	刊年	部門	語彙						
					方輿	地利	地理	輿地	風景	坤輿	地図
38	31	女節用集罌粟嚢家宝大成	1743	10					言語		1
39	32	袖宝節用集	1749	13		言語					
40	32	寺子節用錦袋鑑	1751	−							
41	31	永代節用大全無尽蔵	1752	10						?	2
42	33	万世節用集広益大成	1756	13		言語					2
43	33	大節用文字宝鑑	1756				乾坤		言語		
44	34	袖中節用集	1758	10					言語		
45	35	女節用集文字嚢	1762	10				(?)	言語		2
46	35	百万節用宝来蔵	1769	13							5
47	36	早引節用集	1770	−			(?)		○		
48	37	文翰節用通宝蔵	1770	13							3
49	37	満字節用錦字選	1771	13							6
50	38	早引節用集	1776	−					○		
51	39	増補童子字尽	1776	−							1
52	39	大広益字尽重宝記綱目	1781	33							
53	40	万代節用字林蔵	1782	13							6
54	41	大成正字通	1782		○†		地理*	地理	言語	○††	
55	43	日本節用万歳蔵	1785	13					言語		2
56	44	早考節用集	1785	6					言語		
57	44	節用集	1786	6					ざつ		
58	42	字典節用集	1791						言語		
59	45	掌中節用急字引	1794	13							
60	45	早引節用集	1795	−					○		
61	46/47	字貫節用集	1796	15					言語		
62	48	絵引節用集	1796	18			天地		乾坤 言語		
63	49	大豊節用寿福海	1799	13							4
64	49	字尽節用解	1799	10							
65	50	倭漢節用無双曩	1799	13							7
66	51	万宝節用富貴蔵	1802	13			乾坤*				8
67	52	長半仮名引節用集	1804					天	言		
68	53/54	字引大全	1806	13	○†		乾坤	乾坤		○†	
69	55	懐宝節用集綱目大全	1812	13							
70	56	早引節用集	1814						○	(?)	
71	59	字宝節用集千金藏	1818	13							1
72	59	文会節用集大成	1819	7					言語		2

地誌的付録	備考
札所一覧（西国・洛陽・大坂）・国尽。京都名物。京町尽	
京町尽。五山。国尽	
国尽。京町尽	
江戸近郊寺社一覧。京町尽	
国尽・京町尽	
京町尽。「京都南都大仏殿略伝記并京三十三間堂矢数記」	
外国人物図。国尽。「京都南都大仏殿伝記」「江戸道中記」「伊勢道中記」。京町尽	
「富士山出現図」。国尽。大坂からの道程。京町尽	
国尽。京町尽	
国尽・京町尽	地図は世界図（地球儀）。付録に渾天儀の図あり
「六十余州　付外国并朝鮮国名所」	附録の「扁引字尽重宝記」の部門に「地理」門がある
国尽	チ乾坤：地里
	部門名に「地理」がある †チ地理：地および地理：輿地の同義語として掲出 *（チノスヂミチ） ††チ地理：地の同義語として掲出 チ地理：地球（チノカタチ）
国尽・外国人物図。京町尽	地図は世界図を含む
京町尽	
	コ器財：渾天儀
国尽・京寺院一覧	
国尽・京町尽	
「本朝遷都考」・国尽	
国尽。外国人物図。寺院一覧（京・大坂・堺）。 京町尽	*理に（スチ） コ器財（増字）：渾天儀
京町尽	コ器：渾天儀
京町尽	†乾坤：地の同義語として掲出 コ器財：渾天儀
国尽。京町尽	
国尽	
国尽。京町尽	
国尽。大坂より道程。五山。京町尽	

番号	巻数	書名	刊年	部門	語彙						
					方輿	地利	地理	輿地	風景	坤輿	地図
73	60	新撰正字通	1822	10			乾坤*		言語		
74	60	俳字節用集.	1823	13							
75	61/62	早字節用集	1825	13							
76	63	倭節用集悉改大全	1826	13			乾坤	乾坤	乾坤 言語		12
77	64/65	大全早引節用集	1827	−					○		
78	66	大宝節用集文林蔵	1830	13			乾坤*		言語		3
79	67	懐宝節用集	1836	−					○		
80	68	増補訂正掌中要字選	1841	10					(？)		
81	68	書状文字自在引	1842	−					○		
82	69	意見早引大善節用	1843	−							
83	69	早引節用集	1843	−					○		
84	70	数引節用集	1844	−					○		
85	71	数引節用集	1846	−					○		
86	71	文字通	1847								
87	72	嘉永早引節用集	1855	−					○		
88	72	新いろは節用集大成	1849	13					○？		
89	73/74	大成無双節用集	1849	12			乾坤		言語		6
90	75/76	大日本永代節用無尽蔵	1849	30			乾坤	乾坤	乾坤 言語		33
91	77/78	万代節用集	1850	15			地理†	地理	天文		2
92	79/80	永代節用集	1850	13			乾坤*		言語		1
93	83	早引節用集	1862	−					○		
94	57/58	江戸大節用海内蔵	1863	23			地	○†	言語	地	29
95	84/85	大全早引節用集	1864	−			○*	○	○		

・「巻数」は『節用集大系』における当該節用集の収録巻数を示す。
・語彙欄の各語については，それが採録されている場合に，その部門名を記載した（部門立てのない節用集については「○」で表示した）。また見出し語としてではなく他の語の注釈として掲出されている場合にも「○」で示して見出し語については備考欄に示した。資料が汚損して当該語の採否がわからない場合は「？」を記した。
・備考欄では語彙欄に掲げた以外の語について，「部門：語彙」という形式で記載した（たとえば「コ器財：渾天儀」とは「コ」の器財の部に「渾天儀」が掲出されていることを示す）。その際，（ ）内はその語の訓である。
・「地理」に「チリ」以外の訓がつけられていたり注がつけられている場合には部門名に*を付し，備考欄に括弧書きでその内容を示した。

地誌的付録	備考
	*理に（コ□ハリ）
	部門名の一つに「地理」あり
	「乾坤」部の説明文中に「地理」が使われている。 チ乾坤（増字）：地球（チノカタチ）
国尽	チ器財：地球図（セカイノズ） フ器財（増字）：分間絵図・折地図 コ器財：渾天儀
	渾天機
大日本国尽。京町尽	*（チノリ）
国尽	
	コ方時器用に渾天儀
世界万国国尽。二十二社。三十番神。札所（西国・坂東）。淀川筋両岸道中記。京町尽。国尽・諸国神社記	コ器財に渾天儀
二十二社。三岳。高山一覧。国尽。江戸町尽。東海道・中山道道中記。大河一覧。寺院一覧（江戸・京・大坂）。神社一覧	チ器財：地球図（セカイヅ） フ言語：分間絵図・折地図 コ器財：渾天儀。 地図は世界図を含む
京町尽。江戸町尽・国尽・「日本繁昌地名尽」	部門名の一つに「地理」あり †チリとチノリと二重に登録 地図は「清朝輿地全図」を含む
国尽	「乾坤」部の説明文中に「地理」が使われている。 *（孟子）
諸国一宮一覧・国尽・江戸町尽	†チ地：坤輿の同義語として掲出。また「坤輿儀」も併記されている。 チ地：地球 チ器財：地球儀・地球図 地図は世界図および蝦夷・朝鮮・琉球の各国図を含む
	*（孟子）

‘Tiri’（geography）in Premodern *Setuyosyu*

TATUOKA Yuuzi

（Keywords : geography, *Setuyosyu*, premodern Japan）

Setuyosyu was a common title of reference books for beginners or ordinary people. This author examined the entry of ‘tiri’（geography）in *Setuyosyu* to know how generally the word ‘tiri’ was used in vanacular life. It was discovered that the word ‘tiri’ was not used widely in their life until the end of the 18 th Century.